

Female genital tract の収縮を再考する

妊娠時の子宮平滑筋の収縮とその制御 (4)

慢性炎症

占部 智

Summary

早産は周産期領域において解決すべき重要な課題であり、慢性炎症性疾患である歯周病が早産の危険因子として注目されている。われわれは、慢性炎症が早産を誘発するメカニズムを解明するため、歯髄内に歯周病原菌を封入し全身性炎症を持続させた歯性感染マウスを用いた慢性炎症性早産モデルを作成した。炎症の主体は卵膜にあり、炎症性サイトカインが子宮収縮の増強に大きな役割を果たしていること、プロゲステロン投与が卵膜組織における抗炎症効果と子宮収縮抑制効果を認めたことから、慢性炎症が早産に及ぼす影響について解明する一助になる可能性が示唆された。

Key words

慢性炎症

早産

歯周病

Porphyromonas gingivalis

プロゲステロン

はじめに

早産の多くは前期破水や切迫早産からの自然早産であり、これらの自然早産を予防できれば周産期予後改善に大きな役割を果たすことができる。自然早産と妊娠中の母体炎症は密接な関連があり¹⁾、近年、歯周病が早産や子宮内胎児発育不全の危険因子であると報告され注目されている²⁾⁻⁴⁾。歯周病は細菌感染による全身性の持続性慢性炎症性疾患であるが、妊娠は内分泌環境の変化や唾液の分泌低下、悪阻などのために歯周病の増悪因子となることが報告されている⁵⁾。しかし、歯周病が早産を誘発するメカニズムや妊娠中の歯周病ケアによる予防効果に一定の見解は得られていない⁶⁾。早産ハイリスク症例に対する黄体ホルモン(プロゲステロン)の早産予防効果が報告され、早産既往患者に対する17-hydroxyprogesterone caproate (17-OHPC)の筋肉注射と妊娠中期の子宮頸管長短縮例への天然型プロゲステロン腔錠投与などの早産ハイリスク症例に対する予防投与が、2008年に米国産科婦人科学会(American College of Obstetricians and Gynecologists ; ACOG)で推奨され、そのほかの早産リスク症例に対する投与などの研究が進められている。

本稿では、歯性感染マウスを用いた慢性炎症性早産モデルでの子宮収縮とその制御および天然型プロゲステロン(P₄)投与による早産抑制効果について述べる。

Satoshi Urabe

広島大学大学院医系科学研究科産科婦人科学